

## 神にとりなすモーセ

民数記11章35節～12章16節  
2021年4月11日

日本バプテスト連盟引退牧師  
松藤 紀年 師

民数記の[タイトル]は、ヘブライ語の直訳で、  
『**荒れ野にて**』

とあります。また、ギリシャ語では、

『アレスモイ』

と訳されています。その意味は数字の数であります。その数という事から、

『民数記』

と名付けられています。

今日の民数記の聖書箇所は、皆様は既に、出エジプト記を何回も何回もお読みになって、その所から、感動と喜びを学んで居られる事と思います。そして、今日の聖書箇所は出エジプト記で詳しく、読み取ることが出来ます。共同訳聖書をお手元にお持ちだと思いますが、聖書の最後のページに地図が掲載されています。その[2 出エジプトの道]という所を御覧戴きながら、メッセージをお聞き戴きたいのです。

イスラエルの民が40年を掛けて、神様の備えられた乳と蜜の流れる里カナンに向けての、出エジプトの旅路のルートがそこに描かれています。地図では読み難いかも知れませんが、出エジプト出発からカナンに至るルートが矢印で記されていますので、

『イスラエルの民はこの様に歩んだのだな』  
と言う事が地図から読み取れます。地図上では瞬時に旅することが出来ますが、現実には聖書

が語る月日は、40年を掛けて、苦難の旅が続けられたことが、この民数記からも、また、出エジプト記の中からも、詳しく読み取る事ができます。

ここで、モーセについて少し触れておきたいと思います。モーセはイスラエルの民を、エジプトでの不自由で、しかも、過酷な束縛からの解放のため、導き出した指導者であります。この出エジプトの出来事は、全てが神様のご計画の中に、また、御手の中に守られ、そして、全ての旅路が守られていることを、改めて学ぶ事が出来ます。そして、モーセは、イスラエルの民の指導者であり、また、預言者であり、その生涯は40年毎の3期に別れています。

モーセの誕生とエジプトでの40年、ミデアンでの40年、そして、出エジプトと荒野での40年、シナイ山に於ける契約等々があります。モーセは、3人兄弟の末っ子として誕生しました。兄アロンは、大祭司であり、雄弁であったようです。また、姉ミリアムは 女預言者であったと記されています。いわば、モーセはイスラエルの民のリーダーとして、なるべくしてなったのだと思います。しかし、現実にはモーセは、イスラエルの民のリーダーとして、人間的に相応しかったか・・・  
と言え、決して

『そうではなかったのではないか』

と思います。言葉において、指導力において、また、多くの民を率いる積極的な能力も持ち合わせていなかったのでは・・・。しかし、そのようなモーセを、神様は、ここで言う、出エジプトという、大きな働きの担い手として、お立てになりました。

今の時代のように新幹線があり、電気があり、ガスがあり、全ての器具があり、何不自由無く過ごせる様な恵まれた時代ではなかった事を考える時に、如何に出エジプトが、困難極まるものであったか、想像を絶するところであります。もしも、その環境に私達が置かれたならば、3日と持たないのではないかと思います。それ程私達は、この出エジプトの舞台と、全ての面で大きく隔たりがあると思います。想像する事さえ困難を覚えるように思います。

実際のカナンに向かう旅路を、私達は聖書を通して読み解くことしか出来ません。しかし、そこにも限界があります。先ほど申しましたように、環境の違いを埋めることは到底出来ませんし、また、想像するにも、その想像の域を超えた状態での苦悩の旅、生活、そして、歩みであった事を思います。しかし、モーセに対するイスラエルの民の容赦ない罵倒、また、不平不満、様々な事柄を一手に、モーセは受け止めて居ります。モーセは全てを忍耐し、絶えて、神様が示して下さった、このカナンに向けての旅路を続けます。

民数記12章3節には、次の様に聖書は語っています。

「モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった。」

また、口語訳には次の様に書いてあります。

「モーセはその人となり柔和なこと、地上のすべての人にまさっていた。」

と語っています。つまり、神の前にも、人の前にも謙遜であった。口語訳が語るように

「柔和なこと地上のすべての人にまさっていた。」

この事が、出エジプトという、大きな業、働きを成し遂げた大きな要因であると思います。

このモーセの神様に対する忠誠、確信そして、神様に仕える喜び、この信仰は私たちが神様に仕える喜び、この時代の中において学ぶべき御言葉ではないかと思います。私達はこのモーセの信仰に、より近く学び、また、見倣うべきものを読み取る事が大切ではないかと思います。

民数記12章7節を見ますと、次のように記されています。

「わたしの僕モーセはそうではない。

(イスラエルの人々の思いとは違う)

彼はわたしの家の者すべてに信頼されている。」

口語訳では、

「彼はわたしの全家に忠信なる者である。」

と記されています。つまり、

『モーセは神と人にと愛され、また、柔和であり、謙遜であり、そして、神様に対する、忠実なる僕であった。』

と言うことが読み取れます。

この様に神様から称賛、お褒めの言葉を掛けて戴いた者は、聖書の中にも数少ないと思います。個人的にはモーセとヨブの名前が思い当たります。それ程指導者の働きが、如何に重要かつ、忍耐苦勞が大きいものであったかは計り知れません。それでもモーセが従順で、自分に厳しく、謙遜であり続けたのは、神様への絶対的な信頼と希望、また、約束の確信が、

モーセの中にあつたという事が分かります。

いま、教会は宣教の苦難の中にあります。教会員の高齢化、子供の少子化さらに、今や全世界に拡大したコロナウイルスの感染症の脅威は、終息が見えないどころか、拡大感染が止まりそうにもありません。この様な異常環境の中で、如何に宣教活動に取り組むか、ある意味で、神様からの、呉ナザレン教会に対する真価が問われているのではないのでしょうか。主にあるお一人おひとりの働きを、神様は期待し待ち望んでおられると思います。

いま、私達は神様から戴いた賜物を、主の御栄のために、愛をもって、先ほど教会学校で讚美しましたように、

**「惜しみなく、神様のご用のために、  
献げ続けたい。」**

と思います。また、そのために、共に祈り続けようではありませんか。一日も早く移動や、交わりや、会話が、自由に出来るように、お腹の底から神様を讚美する日が、一日も早く、神様の御業と癒しが成されますように、信じ、祈り続けたいと思います。

お祈りを致します。

天の御父様、今朝の御言葉を有難うございます。今朝はモーセの出エジプトに於ける信仰を私達は学ぶ事ができました。

モーセの信仰の何十分の一か、何百分の一かを、私達は個人的には見倣うことも行うことも、不可能な状態にあるように、思います。

しかし、神様が私達に託されている思いを心に留めつつ、謙虚に心を開き、神様から戴いた多くの恵み、賜物を惜しみなく主に献げ、喜びと感謝の生活へと変えて下さいますように。

主の憐れみと赦しの中に、日々の歩みが守られますように。

主の聖名を通して、このお祈りをお献げ致します。

アーメン。